

『報恩講にお参りを』

河野 篤

皆さんは、お手次のお寺様や別院、そして東本願寺にお参りされたことがあるでしょうか。

私にご縁がありまして、先月に東本願寺で報恩講という親鸞聖人のご命日のお勤めに、応援スタッフとしてお手伝いをさせていただきました。そのときに、感じたことがありました。

お勤めの期間中は、全国各地からたくさんの方がお参りに来られます。その中には、3月11日に起こった東日本大震災で被災された地域の方々もお参りに来られていました。地震発生から9ヶ月が過ぎます。当然、今現在も復興作業は進んでいます。そんな中、親鸞聖人のみ教えに遇おうと、最終日の11月28日には2万人を超える方々が、本堂にお集まりになっているのを目の当たりにしました。

歎異抄第二条には、親鸞聖人のお弟子が、たくさんの国境を越えて、お念仏による救いとは何か、ということを知るために身命をかえりみずして尋ねていたということが述懐されていますが、そこには『身命をかえりみず』とあります。

今回、お参りに来られた方々をお迎えし、一緒にお参りをさせていただきながら、なぜこんなにもたくさんの方が集まるのか。遠路はるばる命懸けで、というのは大げさかもしれませんが、750年経った今もなお、たくさんの人が集まり、心を動かし続ける親鸞聖人とはいったい何なのか、ということを考えさせられました。

東本願寺では、昔からこの報恩講を一番大切な仏事としてきました。しかし、大切な仏事とは言いながら、ただ準備などが大変という思いが先行し、あまり深く考えることがありませんでした。報恩講に限らず、日々のお勤め、そしてお参りする意味を改めて問い直していきたいと思います。